俳人協会 青森県支部

会報

発行所　俳人協会青森県支部
（事務局）
〒038-0004
青森市富田２丁目10の10
☎ 017-781-6005

新年紙上俳句大会

初糶の子牛に藁の匂ひかな
鈴木志美恵さん（五戸）が大賞

鈴木志美恵 さん

俳人協会青森県支部主催の恒例新年紙上俳句大会は一月十一日投句締め切りで、総数八百八十二句が集まり、昨年より大幅な増加となった。二十四人の選者による選句の結果、鈴木志美恵さん（薫風・五戸）の句が大賞に選ばれた。準大賞には、蒲田吟竜さん（航・深浦）。

大賞に輝いた鈴木さんは、近くの小さな牧場にいる牛を、いつも気分転換に眺めに行くという。仔牛は七ヶ月ほどで競りに出され、藁の香が残っているその仔牛のあどけなさを、いとおしく思ったという。万感こめての一句に、選者の先生方の共感を頂いて嬉しく思うと、喜びを語ってくれた。今回で二度目。

入賞者、得点は次の通り。

（得点が同点の場合は天位、地位、人位、秀逸の数等によって決定）

③小林とみ15点④下山延子14点⑤吉田千嘉子13点⑥中島五郎12点⑦須藤千和子11点⑧大川恵子11点⑨加藤健一郎10点⑩成田きみ9点⑪敦賀恵子9点⑫髙橋千夜湖9点⑬竹浪誠也9点⑭木村あさ子9点⑮斎藤ひでを9点⑯黒田長子9点⑰桜田花音8点⑱斎藤ひでを7点⑲三上裕子7点⑳森下睦子7点

山出しの声をひとつに山始
準大賞は蒲田吟竜さん（深浦）

入選作品

初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
初競りの指一本で決まりけり　中島　五郎
初仕事少し濃いめのお茶を入れ　須藤千和子
金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
千手にも似たる枝振り淑気満つ　成田　きみ
初孫の手形のみなり年賀状　敦賀　恵子
初漁の舳先に松の緑かな　髙橋千夜湖
身じろぎもせぬ門衛の淑気かな　竹浪　誠也
急くことはもう何もなし初山河　木村あさ子
刀匠の烏帽子きりりと鍛冶始　斎藤ひでを
折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子
新春のきれいな風に吹かれけり　桜田　花音
名峰の正座の姿初御空　斎藤ひでを
ゆづり葉や頑固に守る武家作法　三上　裕子

令和四年度総会は中止
俳句大会はまた紙上句会に

新型コロナウイルス感染は、下火になったと思われたが、第六波がたちまち県内を襲った。東北では二番目という感染者数にただただ恐れるばかり。当支部総会も開催を見送ることにした。俳句大会、吟行会もとり止めとする。

また、東北大会も青森大会（令和二）、岩手大会（令和三）に次ぎ今年度の宮城大会も紙上句会となった。「雑詠」締切　五月三十一日

各大会の俳句募集

第七十一回　青森県観桜俳句大会
兼題「桜」「風船」「雁風呂」。「花」は不可。
締め切り　三月二十五日

第二十九回　増田手古奈記念大鰐温泉俳句大会
兼題「つつじ」一切「春季雑詠」
締め切り　四月十五日

第六十一回　俳人協会全国俳句大会
「雑詠」二句一組　何組でもよい。
締め切り　四月十五日

第十五回　青森県民俳句大会
兼題「剪定」「若布」「春季雑詠」
締め切り　四月二十日

木附沢麦青　選

天位　日めくりの残る一枚去年今年　高橋まち子
地位　初鞦の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
人位　急くことはもう何もなし初山河　木村あさ子
秀逸　初鞦のまづ千両や花卉市場　高橋　秀東
餌撒きて庭の雀へ年賀とす　竹内　健悟
大まかに予定を組みし初暦　相馬　禮子
真つ先に百寿の母へ御慶かな　対馬　迪女
三日はや忘るることの始まれり　土井　三乙
佳作　山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
初競りへ仔牛おどおどして現るる　齊藤　君子
まつ先に遺影と御慶交はし合ふ　榊　せい子
初雀吾が舌打ちに応へたる　雨森　虹女
門松に小首かしげて雀来る　小林　五月
初電話術後のこゑと思へざる　下河原　勝
なまはげの声まで化けてしまひけり　くどうひろこ
三ケ日雪を掻かねば始まらぬ　島田よう子
初競りの御祝儀相場躍り出す　戸川美重子
夜勤明け白衣のままの初日かな　成田　政美

木村　秋湖　選

天位　ゆづり葉や頑固に守る武家作法　三上　裕子
地位　縄文の丘に広がる初山河　宮内　香宝
人位　初景色校歌の山を迎ぎ見る　江渡永見子
秀逸　霊峰に雲の流るる淑気かな　寺岡　洋子
初電話術後のこゑと思へざる　下河原　勝
岩木嶺は母のふところ初茜　中村しおん
義経にゆかりの社破魔矢受く　佐藤　幸子
初晴の大海原でありにけり　七戸富美子
海底の長きトンネル旅始　加藤めぐみ
初夢の若き君居て弘前駅　諏訪　正子
またひとつ生きて数の子噛みしめる　小林　小亀
岩木嶺を包む茜や年新た　馬場　裕子
聞き上手話し上手の笑ひ初め　葛西のり絵
金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
叶へたき故郷への旅初茜　立花　夕海
横向きが母似と思ふ初鏡　雨森　虹女
遠き日の小さきひと間や絵双六　野村　英利
初凪や出船の水尾の末広に　山田のぶ子

小野　寿子　選

天位　元日の穏やかな時米を研ぐ　藤田　正子
地位　急くことはもう何もなし初山河　木村あさ子
人位　子らの声聞えぬ路地や寝正月　木村　秋湖
秀逸　降る雪を七色に染めえぶり摺る　葛西　栄子
初鞦の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
新春のきれいな風に吹かれけり　桜田　花音
これよりは楽しむ齢を初鏡　井手上省子
ありえなき恋愛運や初みくじ　小泉　靜子
金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
初景色校歌の山を迎ぎ見る　江渡永見子
釜臥の山に拍手初御空　相馬　禮子
衣ずれの茶室に満つる淑気かな　萬年　和子
霊峰に雲の流るる淑気かな　寺岡　洋子
初暦生まれ月には師の句あり　秋谷美智子
勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
岩木嶺は母のふところ初茜　中村しおん
初日影さす海に色山に色　田端　千鼓
元日の床の間に置く壺ひとつ　畑中とほる

土井　三乙　選

天位　百年を生きる産声初明り　小林　とみ
地位　金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
人位　百日の嬰の一つ身縫始　鈴木志美恵
秀逸　初鞦のまづ千両や花卉市場　高橋　秀東
新年会多弁となりて夫戻る　大川　恵子
初凪や祖父の一字を船の名に　稲場　暁子
東京発津軽弁入り賀状来る　中澤　玲子
折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子
去年今年日記二冊を並べ置く　瀬川　文香
大まかに予定を組みし初暦　相馬　禮子
懐かしき癖字そのまま初便り　稲場　暁子
初鏡うしろ姿を正しけり　藤田　豊子
初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
日めくりの残る一枚去年今年　高橋まち子
母がゐてこその故郷鏡餅　木村　幸子
新春のきれいな風に吹かれけり　桜田　花音
里は丸嫁して四角の雑煮餅　成田　政美
子の部屋は怪獣の国年新た　松宮　梗子

草野　力丸　選

天位　初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
地位　子の部屋は怪獣の国年新た　松宮　梗子
人位　初孫の手形のみなり年賀状　敦賀　恵子
秀逸　老体といへど初湯を溢れさす　斎藤ひでを
コロナ禍や沈黙深き初詣　成田　秀継
身綺麗に老ゆたきものと初鏡　小野寺和子
屠蘇祝ふ下戸の家系のじゃっぱ汁　葛西　行雄
歩まねば置かるる気配七種粥　髙田　栄子
山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
年酒酌むぶつきらぼうでひたむきで　櫛引　麗子
三歳の春着にお膳はこばるる　齊藤　君子
衣ずれの茶室に満つる淑気かな　萬年　和子
姦しく別腹もちて女正月　樋口　京子
寝正月野良猫すでに詣で来し　堰合　チエ
イコールで始むエクセル初仕事　小杉　郁子
赤ん坊の耳透きとほる初湯かな　中村しおん
ひらめきは天にまかせて初句会　桜田　花音
折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子

岩村多加雄　選

天位　復興の村鮟鱇の市始　白戸　星央
地位　獅子頭とれば禿頭海の凪ぐ　笹原　郁子
人位　山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
秀逸　初売の真鱈の透き歯値札噛む　櫛引　麗子
初仕事少し濃いめのお茶を入れ　須藤千和子
ゆづり葉や頑固に守る武家作法　三上　裕子
じよんからの唄ひ切るまで初湯浴ぶ　小野　寿子
切れ味は代々秘伝鍛冶始　成田　政美
年酒酌むぶつきらぼうでひたむきで　櫛引　麗子
人日の医院元気な患者群る　後藤　朋子
餅花や起伏かすかに通し土間　野村　英利
鳶の笛いま初空の風を得ぬ　野村　英利
初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
初景色丸くも見ゆる水平線　佐々木寿子
雪掻いて今年の道を開きけり　今　順子
初鞦の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
元朝の真白き街を風が行く　土井　三乙
三日はや忘るることの始まれり　土井　三乙

奥田　卓司　選

天位　子育ての子の背ながす初湯かな　森下　睦子
地位　初仕事少し濃いめのお茶を入れ　須藤千和子
人位　新年会多弁となりて夫戻る　大川　恵子
秀逸　背伸びし子らの笑顔や屠蘇を酌む　大瀬　響史
　　通院を書き入れ馴染む初暦　敦賀　恵子
　　猫の手のお手付きもある歌留多かな　蝦名　がこ
　　予期もせぬ客に戸惑う年始め　渡邊　寂隆
佳作　無垢の目の子の仰ぎゐる初御空　三ヶ森青雲
　　書きぞめに今年の希望太々と　工藤　琢磨
　　結局はお家で過ごすよ三ケ日　佐藤　暖和
　　麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
　　初鏡白寿の母の髪を梳く　工藤　邦子
　　静けさのなかの緊張筆始め　七戸たか女
　　元日の穏やかな時米を研ぐ　藤田　正子
　　みどり児のこゑあげ笑ふ初湯かな　くどうひろこ
　　夜勤明け白衣のままの初日かな　成田　政美
　　病み勝ちの姉の初髪小さく結ふ　清水　雪江
　　数の子をこりこり噛んでまだ傘寿　小笠原聖子

小野寺和子　選

天位　初孫の手形のみなり年賀状　敦賀　恵子
地位　玉砂利の一糸乱れぬ淑気かな　宮内　香宝
人位　岩木嶺を引つ張つてくる初電車　畠山　容子
秀逸　麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
　　姦しく別腹もちて女正月　樋口　京子
　　初日待つ足踏みしつつ葦毛崎　石垣　浩造
　　神杉を透りゆく風淑気なる　村田加寿子
　　のんのんと津軽の雪やお元日　築舘　秋水
　　初競りの指一本で決まりけり　中島　五郎
佳作　岩木嶺を包む茜や年新た　馬場　裕子
　　読初や栞の分かつ去年今年　松橋喜世美
　　悠然と二羽の鳶舞ふ松の内　萬年　和子
　　初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
　　心にも確と施す初化粧　鈴木　操
　　初糶の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
　　ひらめきは天にまかせて初句会　桜田　花音
　　初漁の舳先に松の緑かな　髙橋千夜湖
　　見はるかす故山の頂初日さす　中村　静江

栗山　朗子　選

天位　元日の床の間に置く壺ひとつ　畑中とほる
地位　無垢の目の子の仰ぎゐる初御空　三ヶ森青雲
人位　後を継ぐ子には重たき獅子頭　戸川美重子
秀逸　身じろぎもせぬ門衛の淑気かな　竹浪　誠也
　　初明り玻璃いちまいをかがやかす　小林　小亀
　　十年日記買ふ使ひ切るまで生きるため　中澤　草子
佳作　衣ずれの茶室に満つる淑気かな　萬年　和子
　　袖を手にくるくると来る春着の子　小野　寿子
　　紺碧の空眼にしむや去年今年　坂本　吟遊
　　女正月三人寄れば秘密めく　佐藤いく子
　　刀匠の烏帽子きりりと鍛冶始　斎藤ひでを
　　シャンパンの栓飛ぶ音や去年今年　大瀬　響史
　　一笛に魂入りぬ獅子頭　市川　明子
　　淑気満つ欄間の竜の尾の反りも　上重　佳子
　　初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
　　弾き初めはストリートピアノ拍手涌く　葛西　栄子
　　雄鶏の凜と羽ばたく御慶かな　今　順子
　　円周をはみ出してゐる喧嘩独楽　黒田　長子

小泉　静子　選

天位　初糶の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
地位　満席の釣船動く二日かな　佐藤　霜魚
人位　祖母の手の寸で計りし鏡餅　橘　すなお
秀逸　陸奥湾に片袖残し初茜　瀬川八百子
　　初風や鼻で小突きぬ飼葉桶　佐藤いく子
　　初鏡白寿の母の髪を梳く　工藤　邦子
　　読初や栞の分かつ去年今年　松橋喜世美
　　宝船浮世の旅の波高し　宮内　香宝
佳作　老体といへど初湯を溢れさす　斎藤ひでを
　　新年会多弁となりて夫戻る　大川　恵子
　　猫の手のお手付きもある歌留多かな　蝦名　がこ
　　偕老の願ひは同じ年の酒　工藤　祐子
　　膝にのる嬰も加はり福笑ひ　秋谷美智子
　　七草を摘みて日向をひろげたり　くどうひろこ
　　心にも確と施す初化粧　鈴木　操
　　岩木嶺のどちら正面初雀　小野いるま
　　一灯の籠りの家に注連飾　和田　宗三
　　子らの声聞えぬ路地や寝正月　木村　秋湖

郡川　宏一　選

天位　身じろぎもせぬ門衛の淑気かな　竹浪　誠也
地位　初仕事少し濃いめのお茶を入れ　須藤千和子
人位　勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
秀逸　山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
　　書初に齢重ねても夢と書く　佐々木寿子
　　みどり児のこゑあげ笑ふ初湯かな　くどうひろこ
佳作　新春のきれいな風に吹かれけり　桜田　花音
　　病み勝ちの姉の初髪小さく結ふ　清水　雪江
　　福ねがい家族で作った鏡餅　田村　大成
　　麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
　　三歳の春着にお膳はこばるる　齊藤　君子
　　一笛に魂入りぬ獅子頭　市川　明子
　　餅花や起伏かすかに通し土間　野村　英利
　　初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
　　黄泉に住む師に申したる年賀かな　木村あさ子
　　母の齢越したりと書く初日記　杉山　畝女
　　折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子
　　久々に次女が加はり雑煮椀　石﨑　志亥

今　順子　選

天位　山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
地位　餅花や起伏かすかに通し土間　野村　英利
人位　高く跳ね獅子舞歓喜の歯を鳴らす　金田一一子
秀逸　急くことはもう何もなし初山河　木村あさ子
　　初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
　　百日の嬰の一つ身縫始　鈴木志美恵
　　後を継ぐ子には重たき獅子頭　戸川美重子
佳作　インタビューどんどの焔見遣りつつ　成田　きみ
　　今年こそ新たな自分見つけるぞ　谷川　桃香
　　初凪や鶴の舞橋伸びやかに　加藤健一郎
　　初笑ひ一瞬匂ふチョコレート　敦賀　恵子
　　淑気満つ欄間の竜の尾の反りも　上重　佳子
　　大まかに予定を組みし初暦　相馬　禮子
　　霊峰に雲の流るる淑気かな　寺岡　洋子
　　凡庸に生くる顔なり初鏡　三ヶ森青雲
　　なまはげの声まで化けてしまひけり　くどうひろこ
　　楪や長しと思ふ生命線　中谷　恭子
　　初凪の船昇りくる水平線　外川　幸子

斎藤ひでを　選

天位　初漁や末広がりの水脈ひいて　小林　とみ
地位　初競りの指一本で決まりけり　中島　五郎
人位　初売や印半纏出揃うて　小笠原八千代
秀逸　麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
初鏡白寿の母の髪を梳く　工藤　邦子
後ろ手にお太鼓結ぶ初鏡　木立　邦子
初みくじ皆小吉で恙なし　赤坂　雪洲
真つ先に百寿の母へ御慶かな　対馬　迪女
佳作　お雑煮や誰にも出せない祖母の味　佐藤　暖和
杵と臼持ちて踊るや女正月　石澤　正
長老のあゝだこうだと臼飾る　齊藤　君子
読み初めは子の枕辺に読み聞かす　葛西　栄子
巫女の舞ふ鈴の音色や淑気満つ　成田　晃子
東京発津軽弁入り賀状来る　中澤　玲子
赤ん坊の耳透きとほる初湯かな　中村しおん
官庁街に号令響く出初式　比内　順子
数の子をこりこり噛んでまだ傘寿　小笠原聖子
まづ囲む孫生まるる日初暦　布施　協一

佐々木雅翔　選

天位　御降りに濡れゆく墓碑の南無阿弥陀　田端　千鼓
地位　初糶の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
人位　初漁の舳先に松の緑かな　髙橋千夜湖
秀逸　心にも確と施す初化粧　鈴木　操
爪立てて笑まふ童女の初鏡　蝦名　がこ
勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
あけぼのの祥雲を呼ぶ初太鼓　栗山　朗子
麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
見慣れたる山容にして初景色　高橋　秀東
佳作　ねんごろに反古の束添へ飾り焼く　五十嵐かつ
火気に舞ふ寅の一字や吉書揚　小野寺和子
籠もりける厨の匂ひ去年今年　京谷　みき
のの様に御慶を申す童かな　村田加寿子
大鍋に限る雑煮や子ら遠し　高橋　千恵
巫女の舞ふ鈴の音色や淑気満つ　成田　晃子
書初や墨の香乗せて夢一字　髙橋まち子
初茜威風堂々新社殿　蛯名　喜光
篝火の闇に星生む初社　鈴木　莉花

鈴木志美恵　選

天位　元旦やお岩木山ともう一献　福士　野菊
地位　千手にも似たる枝振り淑気満つ　成田　きみ
人位　天守から鯱の言祝ぐ初御空　瀬川八百子
秀逸　麻痺の身をしばし忘るる初湯かな　加藤健一郎
年酒酌むぶつきらぼうでひたむきで　櫛引　麗子
火気に舞ふ寅の一字や吉書揚　小野寺和子
子育ての子の背ながす初湯かな　森下　睦子
なまはげの声まで化けてしまひけり　馬場　裕子
佳作　元日や山穏やかに精気満つ　市川　明子
一笛に魂入りぬ獅子頭　萬年　和子
衣ずれの茶室に満つる淑気かな　宮内　香宝
宝船浮世の旅の波高し　森下　睦子
初雀雪の綿菓子啄める　小林　五月
門松に小首かしげて雀来る　秋谷美智子
膝にのる嬰も加はり福笑ひ　江口　みよ
姫りんご据ゑて新居の鏡餅　吉田千嘉子
初荷発つ大杉玉に見送られ　黒田　長子
円周をはみ出してゐる喧嘩独楽

髙橋　千恵　選

天位　書きぞめに今年の希望太々と　工藤　琢磨
地位　刀匠の烏帽子きりりと鍛冶始　斎藤ひでを
人位　お雑煮や誰にも出せない祖母の味　佐藤　暖和
秀逸　夢一行添えて賀状の輝きぬ　蒲田　幸子
岩木嶺を包む茜や年新た　馬場　裕子
子等帰り歳時記捲る四日かな　永倉　みつ
歳旦のはだか神輿や湯気の中　佐々木雅翔
百日の嬰の一つ身縫始　鈴木志美恵
今年こそ新たな自分見つけるぞ　谷川　桃香
佳作　この願い天まで届け初詣　津川　愛緒
海峡の沖に蝦夷見ゆ初明り　石澤　正
牛小屋に牛いなくても注連飾　筑田まさ子
書道展琴の音ながれ二日かな　桜庭　恵
年神に合はす傘寿のたなごころ　相馬ふさ子
金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
信号は進めの青や年新た　小笠原八千代
虎の絵のがおと口開き年新た　松田由美子
義経にゆかりの社破魔矢受く　佐藤　幸子

髙橋千夜湖　選

天位　つくづくと山の美し国初明り　森下　睦子
地位　折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子
人位　初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
秀逸　一笛に魂入りぬ獅子頭　市川　明子
読初や栞の分かつ去年今年　松橋喜世美
懐かしき言葉となりぬ羽子日和　郡川　宏一
夜勤明け白衣のままの初日かな　成田　政美
岩木嶺を引つ張つてくる初電車　畠山　容子
二人居のけふは五人や福笑　永倉　みつ
新しき家族は仔犬年迎ふ　髙野万津江
鳶の笛いま初空の風を得ぬ　野村　英利
初景色校歌の山を迎ぎ見る　江渡永見子
雪掻いて今年の道を開きけり　今　順子
橋架ける起重機高し去年今年　坂元　正子
初夢の若き君居て弘前駅　諏訪　正子
元朝の余白ばかりの千枚田　石田かつら
去年の雪今年の雪と輝きぬ　佐藤　幸子
じよんからの唄ひ切るまで初湯浴ぶ　小野　寿子

対馬　迪女　選

天位　千手にも似たる枝振り淑気満つ　成田　きみ
地位　勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
人位　初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
秀逸　夢一行添えて賀状の輝きぬ　蒲田　幸子
二日はや一人暮らしに戻りけり　鈴木ゆき子
神木の真白き幣や年新た　永倉　みつ
健康といふキーワード賀状かな　松田由美子
もはや天の領分なりしいかのぼり　黒田　長子
刀匠の烏帽子きりりと鍛冶始　斎藤ひでを
見慣れたる山容にして初景色　高橋　秀東
佳作　初鏡白寿の母の髪を梳く　工藤　邦子
寂聴の句集「ひとり」を読みはじむ　草野　力丸
衣ずれの茶室に満つる淑気かな　萬年　和子
子等帰り歳時記捲る四日かな　永倉　みつ
初売や印半纏出揃うて　小笠原八千代
赤ん坊の耳透きとほる初湯かな　中村しおん
折り目ある旗ひるがへるお元日　黒田　長子
子らの声聞えぬ路地や寝正月　木村　秋湖

土田　紫翠　選

天位　初競りの指一本で決まりけり　中島　五郎
地位　山出しの声をひとつに山始　蒲田　吟竜
人位　刀匠の烏帽子きりりと鍛冶始　斎藤ひでを
秀逸　身じろぎもせぬ門衛の淑気かな　竹浪　誠也
読初は黒田杏子の証言史　草野　力丸
年明けて宇宙旅行の広告来　相馬　敏光
初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
官庁街に号令響く出初式　比内　順子
佳作　初暦老いにも未知の月日あり　中島　五郎
年玉や樋口一葉新札で　小川　均
陸奥湾の海に叫びし寒稽古　成田　秀継
元朝に厚き新聞ひろい読み　油座　伸広
宝くじ夢だけ買つて去年今年　葛西のり絵
初孫の手形のみなり年賀状　敦賀　恵子
初売や印半纏出揃うて　小笠原八千代
横向きが母似と思ふ初鏡　雨森　虹女
卵かけご飯お替り四日かな　木村　幸子
義経にゆかりの社破魔矢受く　佐藤　幸子

野村　英利　選

天位　初漁の舳先に松の緑かな　髙橋千夜湖
地位　金婚のいのち向き合ひ七日粥　大川　恵子
人位　初糶の子牛に藁の匂ひかな　鈴木志美恵
秀逸　名峰の正座の姿初御空　斎藤ひでを
初凪や祖父の一字を船の名に　稲場　暁子
初荷発つ大杉玉に見送られ　吉田千嘉子
凡庸に生くる顔なり初鏡　三ヶ森青雲
楪や長しと思ふ生命線　中谷　恭子
初暦老いにも未知の月日あり　中島　五郎
あけぼのの祥雲を呼ぶ初太鼓　栗山　朗子
生疵の絶へぬ船なり年酒まく　齊藤　君子
清濁を呑んで七十路七日粥　三上　裕子
初糶の嘘をつけない子牛の眸　くどうひろこ
小豆粥鄙に重ねし齢かな　鈴木志美恵
養生の日々の無聊や去年今年　今田とみを
後を継ぐ子には重たき獅子頭　戸川美重子
夜勤明け白衣のままの初日かな　成田　政美
初日影ささす海に色山に色　田端　千鼓

畑中とほる　選

天位　初暦寅の目光る一枚目　雙　葉
地位　新しき家族は仔犬年迎ふ　髙野万津江
人位　初売の真鱈の透き歯値札噛む　櫛引　麗子
秀逸　牛小屋に牛いなくても注連飾　筑田まさ子
高く跳ね獅子舞歓喜の歯を鳴らす　金田一一子
初景色校歌の山を迎ぎ見る　江渡永見子
懐かしき癖字そのまま初便り　稲場　暁子
初茜威風堂々新社殿　蛯名　喜光
年玉を願いて眠った幼き日　成田　京介
貰っても親に盗られるお年玉　成田　吏希
天守から鯱の言祝ぐ初御空　瀬川八百子
元日の朝の楽しみ年賀状　藤森　陽和
電線に肩寄せ合うて初鴉　五十嵐かつ
一笛に魂入りぬ獅子頭　市川　明子
放水の七色となる出初式　宮下　孝信
初セリや並ぶ魚の目は澄みて　小出登志子
傍らに妻の遺影や寝正月　木村　秋湖
紅白の沖の燈台初景色　松宮　梗子

三ヶ森青雲　選

天位　名峰の正座の姿初御空　斎藤ひでを
地位　母がゐてこその故郷鏡餅　木村　幸子
人位　初鏡うしろ姿を正しけり　藤田　豊子
秀逸　初競りの指一本で決まりけり　中島　五郎
手をつなぎ歩幅を合はす初詣　田村　芳陽
淑気満つ欄間の竜の尾の反りも　上重　佳子
どんど火に焼かるるも良し大達磨　吉田千嘉子
初稽古あとの汁粉を楽しみに　佐藤　暖和
お雑煮や誰にも出せない祖母の味　高橋　秀東
見慣れたる山容にして初景色　相馬ふさ子
初雀日の出近きを告げに来し　金田一一子
高く跳ね獅子舞歓喜の歯を鳴らす　村上　楓
注連縄飾る終の住処と心きめ　雨森　虹女
横向きが母似と思ふ初鏡　下山　延子
勝独楽の力余して停りけり　成田　政美
夜勤明け白衣のままの初日かな　一戸　鈴
崩れてはまた燃え盛るどんど焼き　千葉　禮子
初富士や今ある命感謝して

吉田千嘉子　選

天位　またひとつ生きて数の子噛みしめる　小林　小亀
地位　赤ん坊の耳透きとほる初湯かな　中村しおん
人位　勝独楽の力余して停りけり　下山　延子
秀逸　シャンパンの栓飛ぶ音や去年今年　大瀬　響史
賀状来る夫にあだ名の昔あり　榊　せい子
吹き寄せて野の淡き香や七日粥　杉本喜和子
三ケ日雪を掻かねば始まらぬ　島田よう子
病み勝ちの姉の初髪小さく結ふ　清水　雪江
一生を峡に暮して去年今年　工藤　邦子
だし殻も入りて山家の雑煮膳　齊藤　君子
初日影写真の夫に届きけり　相馬ふさ子
通院を書き入れ馴染む初暦　敦賀　恵子
人日の医院元気な患者群る　後藤　朋子
口角を上げて傘寿の初鏡　工藤　祐子
初東風や哀調おびる津軽三味　村松　圭治
初旅のおくるみの稚よく眠り　髙田美津子
夜勤明け白衣のままの初日かな　成田　政美
崩れてはまた燃え盛るどんど焼き　一戸　鈴

吉田　敏夫　選

天位　初雀吾が舌打ちに応へたる　雨森　虹女
地位　杖二本玄関に置き去年今年　髙野万津江
人位　新春のきれいな風に吹かれけり　桜田　花音
秀逸　オミクロンてふ名にも慣れ初日記　雙　葉
年酒酌むぶつきらぼうでひたむきで　櫛引　麗子
海底の長きトンネル旅始　加藤めぐみ
七草を摘みて日向をひろげたり　くどうひろこ
東京発津軽弁入り賀状来る　中澤　玲子
新年に試し書きする楷書かな　阿保　凛玖
買初の蛍光ペンのピンクと黄　小田桐由紀子
去年今年老いと言ふ語の隅にをり　栗山　朗子
去年今年生きる証しの鍋茶碗　和田たかし
初仕事少し濃いめのお茶を入れ　須藤千和子
年神に合はす傘寿のたなごころ　相馬ふさ子
右尻屋左に蝦夷地初湯かな　相馬　禮子
母がゐてこその故郷鏡餅　木村　幸子
三日はや忘るることの始まれり　土井　三乙
初日浴ぶ南部小富士の真くれなゐ　小笠原聖子

訃報

俳人協会青森県支部事務局長石﨑志亥さんが去る三月三日、三沢市立三沢病院にてご逝去いたしました。ここに謹んで皆様にお知らせ申しあげ、深く哀悼の意を表します。

公益社団法人俳人協会主催・朝日新聞社後援

第59回全国俳句大会　入選者

今井聖選　入選句

日脚伸ぶ小屋に入らぬ鶏一羽　秋谷美智子

今瀬剛一選　入選句

吊し雛はるかな地震を感じをり　斎藤ひでを

大石悦子選　入選句

生涯に空襲疎開蚕豆　高橋　千恵

小川軽舟選　特選句

洗ひ場のスタッフ急募花八ツ手　小笠原八千代

櫂未知子選　特選句

草餅の草よりも濃く仕上りぬ　佐藤　幸子

柏原眠雨選　入選句

古民家に若き移住者山桜　大川　恵子

佐怒賀直美選　入選句

昆布背負ひ檻樓のごとき母の来る　佐々木雅翔

露地隠す豆腐屋の湯気春の雪　大川　恵子

鈴木貞雄選　特選句

昆布背負ひ檻樓のごとき母の来る　佐々木雅翔

西山睦選　入選句

吊し雛はるかな地震を感じをり　斎藤ひでを

野中亮介選　入選句

リラ冷えや頁に栞紐の痕　郡川　宏一

松尾隆信選　入選句

リラ冷えや頁に栞紐の痕　郡川　宏一

（応募数　一二、五二〇句。選者三十七名）

第67回松島芭蕉祭・全国俳句大会

成田一子先生選　入選句

どんぐりや世界遺産の村に住み　秋谷美智子

ごあいさつ

支部長　小野　寿子

北京オリンピックで見せてくれた羽生結弦選手の世界初挑戦の四回転半のジャンプ。失敗に終わったものの、国の内外を問わず、多くの人たちに感銘を与えました。けがの手術、入院、リハビリなど辛い逆境を乗り越えて、厳しい練習等、自分との戦いがあったことでしょう。ジャンプは失敗に終わったが後半の演技のしっかりした美しい滑り。最後まで堂々とやり遂げた不屈の魂に王者の貫録を感じ、テレビの前で胸を熱くし、思わず涙しました。終了後のインタビューの一語一語にも耳を傾けるものがありました。

考えてみますと、これは俳句の道にも通じるものがあるように思いました。目標に向かって進んでいかねばならないということです。自分と向き合うことです。

新型コロナウイルス感染拡大によって、生活は一変してしまいました。句会はもちろん各俳句大会はとり止めとなり、紙上俳句大会という形式に変化いたしました。これが二年も三年も続いている昨今、気持ちのなかに、もやもやが生じており、作品とお顔が一致しなくなってきたのはあながち齢のせいばかりではないと思います。

今回は、恒例の新年紙上俳句大会の報告でありますが、ご応募下さいました皆様に誌上を借りて心から御礼を申し上げ、今後ともご健勝のほどお念じ申し上げます。

支部会費納入のお願い

令和四年度の県支部会費納入をお願いします。令和三年度分お忘れの方、お早く願います。

振り込み先　青森銀行三戸支店

口　座　名　俳人協会青森県支部事務局　布施協一

口座番号　（普通）3000535

編集後記

◆青森県支部は昨年一月に浜田しげる事務局長を送ったばかり。後任の石﨑志亥さんが急にこんなことになろうとは…。悲しみにくれるばかりである。この一年余、故しげる事務局長に劣らぬ仕事ぶりで資料作成、調査、諸報告書等々周囲への細やかな気配りなど、布施事務局次長と共によく尽くしてくれた。心から哀悼の意と、感謝の念を捧げたい。

◆諸事情によって、この会報の遅れをお詫び申しあげる次第である。（寿子）

◆第六波は必ず来ると言われていたが、学者達のその根拠は何だったんだろう？正月の人流の増加はもちろん考えられるが、ウイルスが変異して新しい株オミクロン株に置き換わると言うのを学者達は予見していたのだろうか。ただこのオミクロン、感染力は強いが、あまり重症化しないようである。第三回目のワクチン接種も行き渡り、飲み薬も開発されれば今年中には収束するのではないか。今少しの辛抱である。春は必ず来る。夜明けの前が一番暗い。この中で心豊かに俳句をお稽古しよう。俳句愛好家の皆さん、二十四節気、七十二候を楽しみながら。（協）